

## あとがき

スキューバで海に潜る――、ぼくは「海に生まれ出ること」と解釈しています。

海は生命の起源ですが、地上の動物として発展した人間は再び水中生物に戻ることはないでしょう。しかし、科学技術の所産であるスキューバは、長い間ほとんどが航海や海面漁労といった方面に限られていた人間の行動概念を大きく変えました。それは多くの人々の海洋活動を、平面的行動から垂直的行動へと誘ったのです。

歴史を辿れば紀元前から潜水への挑戦はあって、現在までさまざまな潜水器が考案されてきました。中でもスキューバは水中で呼吸する空気を自らが持ち、水中の環境や現象を生身で直に受け、五感（臭覚・味覚はあまり役に立たない）と第六感の働きをもって、誰もが海中で活動する機会を与えてくれました。

スキューバという人工の肺を持った人間は、あたかも水中へと進化し自由闊達に泳ぐ――もちろん生理的にさまざまな制約がありますが――他の動物にはない独特な知能と感性を持った新種の生物として、海

に生まれ出たように見えるのです。まさにこの新種の生物がダイバーなのでしよう。ダイバーの新天地「うみのなか」は、陸上世界と同じように人が活動活躍できるさまざまな道を用意しています。楽しみ、スポーツ、学術、作業、未知との出会い、冒険的探検的行為等々、潜水行動学から言えば、そこには多様な行動があり、想像力をもつてすれば更にその活動は広がることでしょう。

このような観点から、スキューバダイビングは“水中を歩く技術”ともいえます。単に歩行ということではなく人生を歩むといった意味合いのほうです。“walk”でなく“way”といったほうがいいかもしれません。

現実のうみに潜り（行為）、内なるうみに泳げば（思索）、海中的なる感性を持ち育てることができないかと密かに期待しているのです。

ぼくが辿ってきた六十年あまりの日本のスキューバダイビングの世界を俯瞰しますと、書物としては物質的、技術的なことを記述したもの――無論、これらの書物によって潜水の技術や理論を学びました――が大半だったように思います。ダイバーの心象風景とでも言うのでしょうか、そういった方面について書か

れたものは少ないようです。そんな気持もありまして、我がダイビングの記録と感想を、拙い文章ではありませんが文字だけによる表現を試みたかったのです。果たして内容がこれに該当するものになっているのか、誠におこがましくもあり心配でもあります……。

ダイビングを長いあいだ続けてこられたのは、ぼくのダイビングスクールに通われた方々、田子の海女さん漁師さん漁業組合の皆さん、報道関係の方たち、海上自衛隊の先生方、スキューバ機器・用具メーカーの皆さん、我がスクールのインストラクターだった皆さん、懇意にしてくれた水泳のコーチ諸君、大学の先輩後輩等々、数え切れないほど多くの人たちのお力添えがあったからです。深く心海底より感謝申し上げます。